

# マリッジリング

2007(平成19)年12月15日鑑賞(ユウラク座)

★★★



監督・脚本=七里圭/原作=渡辺淳一『泪壺』(講談社刊)より/出演=小橋めぐみ/保阪尚希/高橋一生/中村麻美/矢沢心/西野まり/田口浩正(アートポート配給/2007年日本映画/99分)

## 第3章

内容の面白さは男女を問わず

……『失楽園』『愛の流刑地』のような「破滅型不倫」ではなく、上司と部下のOLとの、どこにでもある「あるある不倫」の名作が登場！ 不倫関係が始まり継続する中、課長の指に光るマリッジリングは安心の象徴だったが、ある時以降不安と不満の象徴に。しかして、その結末は……？ こんな「あるある不倫」から学べることは多いはずだが……？

### 破滅型不倫 vs. あるある不倫……

この映画は全然話題になっていなかったが、渡辺淳一の原作『泪壺』を映画化した不倫モノ。渡辺淳一の不倫モノでは、『失楽園』(97年)と『愛の流刑地』(06年)が原作も映画も超有名だが、この2つはともに破滅型不倫。これに対して、原作『泪壺』やそれを映画化した『マリッジリング』は、ある会社の上司と部下のOLとの間、どこにでも転がっている「あるある不倫」。

『失楽園』と『愛の流刑地』は「破滅型不倫」だっただけに、他人ゴトの劇的なストーリーとして観るのは楽しかった(?)が、ごく身近にゴロゴロ転がっているこの映画のような「あるある不倫」は、当事者的な目で楽しみかつ参考にできる映画……？

### ヒロインはごく平凡なOL！ ひょっとしてあなた自身……？

主人公はある会社の事務をやっているごく平凡なOLの森谷千波(小橋めぐみ)で、今25歳。同僚の太田康代(矢沢心)らと楽しく仕事をしているし、恋人の藤沢佳介(高橋一生)もいるから、その生活の充実ぶりはまずまず。たった1つの不満は、佳

介の仕事があまりにも忙しいため、最近は会う時間がメッキリ減ってきたこと。また、デート中でもケータイに電話がかかってくる、ひどい時にはベッドの中で急にダメになり、疲れたと言って勝手に眠ってしまったり……。もっとも、これは佳介が他の女に目移りしているためではなく、ホントに肉体的にきつすぎるためだから仕方ない。また、佳介は真剣に今の仕事が一段落したら千波に結婚の意思を伝えようとしている真面目な青年……。

この映画のヒロインは、そんなごく平凡なOL。そして、ちょっとだけ恋人のことで悩んでいるOL。そんな千波にとって不倫など遠い遠い世界のことだったはずだが、ちょっとした心のスキがあったため……。こりゃひょっとしてあなた自身……？

### マリッジリングが意味シな役割を……

前任の野田課長（田口浩正）は人はいいが、女子社員とのコミュニケーション能力はイマイチ。しかし、野田課長の同期だという新任の課長桑村紀夫（保阪尚希）は、マリッジリングが左手に光っているもののちょっといい男。したがって、OLたちの間ではたちまち評判に。

そしてある日、多分これが一番よくあるパターンだと思われるが、食事抜きで1人残業していた千波に対して、紀夫が食事に誘ったことによって大きくストーリーが動き始めることに……。こんな場合、現実には立ち寄るのは居酒屋程度と決まっているが、渡辺淳一の小説ではそれがフランス料理になってしまう……？

おしゃれな店で、おしゃれな食事をしながら、千波が特別なきめきを感じることなく安心して食事とおしゃべりを楽しむことができたのは、紀夫の左手の指に光るマリッジリングのせい。それは千波だけではなく紀夫も同じで、会計士の妻優子（西野まり）に感謝しつつ、どこかに心の空白をもっていた紀夫も、目の前の美しい千波に対して心のときめきを覚えながら、マリッジリングによって「僕は妻帯者だよ」と無言の予防線を張っていた……。

### 秘密の保持は……？

社内不倫の最大の難関は、秘密の保持。つまり周りに悟られることなく、粛々と秘密の関係を続けていることだが、これが意外と難しい。なぜなら、ちょっとした目配せや暗号でのやりとり、あるいはメモの受け渡しやメールのやりとりなどの頻度が増

すにつれて、何か怪しそうと感づかれる可能性が高まるからだ。また世の中には、そういうことに天才的なカンを発揮し見破る能力をもつ人が時々いるもの。しかして、実はこの映画でも、千波の同僚からは「見ちゃったヨ」とささやかれるし、紀夫の親友の野田課長も2人の仲を知っていたよう。

この映画では、テーマをマリッジリング1つに絞って女ゴコロの揺れを描いているから、その他の論点には全く触れていないが、一般的には秘密がバレることによって左遷、クビなどという大問題に発展するケースも……。

### ベストの距離感と相性も、マリッジリングから……

1回こっきりのベッドインや肉体関係は、お互い黙っていれば問題になることはないから気楽だが、肉体関係を継続していく、つまり不倫関係を続けていくためには、互いの努力と気づかいが必要。そして、多分それは婚姻届を出した夫婦以上のものが……。

食事、バーなど数回の会話を経て、2人がホテルに入るまでは当然互いの暗黙の了解があつてのことだが、コトが終わった後の千波のセリフが実に男を安心させるいいセリフ。それは、「気にしないで下さい。私が、こうなりたかったんです。多分、最初から……」という何とも正直な言葉だ。こういう女なら、男は不倫相手として最高！

またそれは千波にとっても同じで、マリッジリングをしている紀夫ならば家庭と不倫をバランスよく両立してくれるはず。仮に自分が佳介と結婚することになった場合、祝福して別れてくれるのは当然。千波がそう考えたかどうかは知らないが、それくらいの戦略はあつたはず……？ したがって、紀夫と千波の不倫の距離感と相性は抜群。そして、それもあのマリッジリングのおかげ……。

### 原作はかなりの傑作！

私は原作の『泪壺』を読んでないが、この映画を観ていると、マリッジリングをテーマとして実にうまく女ゴコロの揺れを描いており、こりゃかなりの傑作と感心した。渡辺淳一の産経新聞への連載小説『象の背中』と『あじさい日記』にはあまり感心しなかった私の目には、『泪壺』の方がよほど面白そうだと感じてしまったもの……。

そんな風に私が感心したのは、2人が不倫関係になるについて、それまでは千波に

とって安心の象徴であったマリッジリングが、次第に不安と不満の象徴に変わり始めたこと。千波が身も心も紀夫一辺倒になっていったのは、紀夫が肉体的に十分千波を満足させたからだ、精神的にはあまり満足させすぎるとこのようにヤバくなってくるもの……？

千波の恋人の佳介はこんな最悪の状況下になっていることを全く知らないまま、ある日千波に対して「結婚しようよ」と申し出たのだが、紀夫のことで頭がいっぱいの千波がそれに応えることができなかつたのは当然。「誰か他にいるの？」といぶかしそうに質問してくる佳介に対して、千波はうなずかざるをえなかつた……。渡辺淳一特有の女ゴコロの描写はまさに絶品！

### これだから女ゴコロはわからない……

千波の気持が紀夫に傾注していくのと同じように、紀夫の気持も次第に家庭より千波の方に……。しかし、千波の誕生日をめぐって「来年の誕生日はきっと……」という紀夫の言葉に対する、「来年はあるの……？」という千波の不安を表したセリフあたりから少しずつ千波の気持には微妙な変化が……。

そんな千波の不安を取り除こうとするかのように、紀夫はある日マリッジリングを外して千波との肉体関係に臨もうとしたが、そこで千波が示した対応は……？ これだから女ゴコロはわからない。せつかく気を遣ってマリッジリングを外したのに……？ 私などはついそう思ってしまったが、そんな紀夫の行動に対する千波の対応とその後のストーリー展開は、あなたの目でしっかりと……。

今不倫中のあなたは男女を問わず、さらに不倫予備軍の可能性が高い多くの男女にとっても、この映画は必見！ なぜなら、いい勉強になることまちがいなしだから……。

2007(平成19)年12月17日記